

「曾我量深と相伝」

太田 浩史

〈一〉

宜しく願います。太田と申します。思い出しますのはですね、一九九八年に蓮如上人五百回御遠忌法要がございました。それで、この御遠忌のお待ち受けというのがありましてですね、私どもは城端別院というところを中心にして、『同人』という、ほとんど見開き一枚の機関誌なんです。事情があつていったん廃刊になったのを、仲間が集まってこれを復興しようじゃないかという取り組みをやりました。その『同人』を出していた同人社というものが、——同人社というのは実は戦後間もなくできたんですが、その『同人』の廃刊と一緒にポシャリまして、それをまた復活しました。その同人社の集まりの中で、せっかく毎月機関誌を発行するのだから、何かみんなで勉強会をやろうじゃないかということになりました。それで、何がいいだろうという時に、やつぱり蓮如上人の御遠忌のお待ち受け

ですから蓮如上人について深く学ぶようなものが何かないかと。こういうことでいろいろ議論して、たまたまですけども、「相伝はどうですか」という話になりました。相伝ということ聞いたのは全くそれが初めてでございました。「最近『相伝義書』というものが発刊されておつて、それについていろいろ議論があるらしい」と、「だからぜんぜん未知のものではあるけれど、しかし議論になっている以上は、やつぱりそういうことについて学ぶと面白いんじゃないか」という程度の発想でした。たまたま近くの、富山県入善町に柴田秀昭という先生がいらっしゃいました。この方は『同人』が発刊された頃に教学研究所の所員でありまして、同じ教学研究所の所員の大先輩に藤元正樹先生という方がおられた。そして、教学研究所の所長は宮城顥さんだったんですが、そういう中でいろいろもまれながら、この『相伝義書』の発刊の仕事のほぼ中枢を担っておられたのが柴田先生なものですから、当時はまだ若かったですけどもお呼びして、そしていろいろ相伝について講義を聞いていくということから始めたんですね。

たしかその講義はですね、今までどこでも為されたことがないものでした。だいたい『略本私考』というものをやるのが普通だったんですが『深解別伝』というものをやっていたのだ。『略本私考』というのは『浄土文類聚鈔』についての一種の相伝の口伝とか講録のようなものです。それに対して『深解別伝』というのは、これは『教行信証』であります。それで、いったん取り組んだんですが、ほんとに聞いたことのない話ばかり

で、しかもこちらは基礎ができていないものですから、ほんとに大変だったんですけれども、ただ、なぜか熱が入りまして。大谷派の特色というんですかね、難しい分からん話を聞くことがなんか楽しいですね(笑)。昔、安田理深先生の相応学舎というものがありました、あそこにも通ったことがありますけども、ほんとに分からなかったです。なんのことやらさっぱり分からない。しかし、そのずーっと分かん分かんという一時間なり一時間半なりを過(こ)しますとですね、なぜかこの体に残るものが爽やかですね。それから何年も経って「ああ、あれはこういうことだったのか」ということが出てまいります。

それで、毎月、ほとんど欠かさずそういう相伝の学習会をずっと続けていってですね、ある程度、勉強と言いますか、研究の成果も発表できるようになりました。当時、相伝を学んでいるという方は本当に少なかったですね。大阪にちよつと、名古屋にちよつと、小松にちよつとというような感じだったと思うんですね。そういう中で、これはみんなが集まって、ちよつと一九九九年はまさに蓮如上人の年でありますから、城端別院は蓮如上人の開基ですから、みんな集合してですね、それで皆さんの思いを順番に語っていただくということで、一九九九年五月二十二日に「相伝サミット」というものをやりました。本日の配布資料にその時の講師陣のメンバーを載せています。懐かしい名前がそろっておりですね。一楽典次、近松暢蒼、柴田秀昭、真継伸彦、西田真因、畑辺初代、庄司曉憲。もはや故人になった方もおられますね。それと、参加したいんだけどもど

うしても行けない、行けないというのはもう病院に入っていて歩くこともできない、それでせめて手紙で参加するという方が藤元正樹先生でありました。

〈二〉

その当時のものをちよつと思ひ出して資料を引つ張り出してきたので、その方々がどういう言葉をそこで語られたり、あるいは言葉を寄せられたかというのを三人ほど紹介したいと思っております。

藤元先生は非常に長文のお手紙をくださいました。「もう這ってでも行きたいんだが」とありました。お手紙の重要なところだけ取り上げて紹介させていただきます。こういう言葉ですね。当時はよく相伝という蓮如教学なんていわれましたが、実際蓮如の教学と云う様なものはありません。あるとしてもそれは相伝という二字が冠せられるわけです(つまり、蓮如の相伝教学というような感じですかね)。蓮如にあるのは『御文』だけです。併も『御文』は断じて教学と呼ばれるべきものではなく、文字通り『御文』であります。それは生活の中にあるものです。相伝の教学と呼ばれるのは実際はあるものではありません。(ここが大事なんです)相伝と呼ばれるのは信心についてのみであります。その様な言葉について十分に理解して置くべき事です。相伝の教学と呼んでいます、それは伝えられた教学という意味です。

従って教学と云いまして曾我教学とか金子教学と呼ぶ
教学とイコールと云うわけにはゆかぬものです。そういう
意味の教学ではなく信心の教学と呼ぶべきでせう。

と。ここに「信心の教学」とあります。しかも、それは私の信心とかあなたの信心じゃなくて、「伝えられてきた信心」だという、こういう話でございます。ですから、なんか私は蓮如教学とか相伝教学という言葉遊び過ぎるんでありますね。ここにやっぱり藤元先生が厳しい釘を打っておられますよ。

それから、畑辺初代さんという、この方は当時教研で実際に仕事をした人ですね、古文書の文字を読んだり。で、その仕事をして感じたことを書いておられますね、

相伝の教学史、相伝が現実に伝授されたり講義されたりしているわけですけど、こういうことをきちんと真宗大谷派の教学史の中に見ていかないと大谷派の教学史の全貌は見えないんじゃないかと思えます。表面だけ見ているといかにも無秩序な異安心だけが出てくるように見えますが、例えば明治の草創期の是海なんかを見ていても、明らかに相伝の教学の影響を受けていると思われまます。そういう意味ではもうちょっと全体的な教学史というものを明らかにする仕事があるんじゃないかと思うわけですよ。

と。是海という、異安心史の中で語られる人です。それが相伝の影響を受けているというんですね。高倉の講録なんかを見てもですね、やっぱり根本が異安心調理ですよ。正しい教学

というのは高倉の伝統の中での『六要鈔』を中心とした『教行信証』解釈、それから外れると異安心というものになりました、それを裁いた記録がたくさん出てまいりますね。ただ、そうするとなんか正統と異端が真宗の教学史のように誤解されますけども、果してそうなのかという。ここがやっぱり、藤元先生も「伝えられた信心の教学」というようなことをいつておられるわけですから、それをただ異安心にしてしまっておくのもつたいいのではないかということをおっしゃっているんですね。私ら若い頃、色んな門徒さんの、古株の人たちから色んなことを聞きましたけども、異安心という言葉をよく言われましたね。その人たちが異安心と言っているのは誰かというとき曾我量深、金子大榮、高光大船とか、こういう人たちが異安心と言っていました。だから、曾我先生とか金子先生という方々を、ある意味で教団の一つの最高峰と皆が感じるようになったのはだいぶ最近のことなんです。それを思わせるのが畑辺さんの言葉にあります。

私は相伝教学を写す仕事に関わっていたわけですけども、その時に嶺藤（亮）先生からいつも折に触れ、何回も何回も言われたことがあるんですね。

と。嶺藤先生というのは、当時、『相伝』の出版というものを決めた参務だった人です。そしてその後、宗務総長になられて、私が得度した時に嶺藤総長だったんですね。ちよūdそ頃のことは、教学研究所の所長になるんですね。ちよūdそ頃のことは、私も嶺藤さんは相伝の出版というものに残りの人生を

捧げてますよね。だから畑辺さんの時に所長の嶺藤さんが畑辺さんにこういうことを言うんですね、

それは何かという、最初は『略本私考』を足利（演正）

先生がガリ刷りしたものを嶺藤先生とか権藤先生とかが

こつそり一緒にやりだしたのだが、

と。最初はガリ版刷りで五十部刷っただけだったそうです。それが今残っていたらほんとに素晴らしいんですけどね。しかしそれは『略本私考』だったと。それはやつぱり当たり障りがないからですね。『教行信証』なんかになると非常に刺激が強かった。で、それをこつそりやっつたと（笑）。絶対目立たないように。場所も場所、鹿ヶ谷というところですね、いかにも陰謀めいた話ですが。でもね、鹿ヶ谷（ししがたに）という所はだいたいそういう人たちが集まるようなんです。昔の、平家に対して反乱を起こすような陰謀とかあったでしょ、俊寛なんかね。それからその後は、昭和六（一九三二）年に大谷大学を追放になった曾我先生と金子先生が興法学園を開いた所も鹿ヶ谷。興法学園に対して鹿ヶ谷で足利先生が相承学園というものを始めたのは昭和十一（一九三六）年。そして十二年に終わっているんです。たった一年。それもゲリラ的に、もつと言えば隠れ念仏的に、できるだけ人に知られないように集まってこつそり勉強したと（笑）。なんでかという、表に出たら自分らも異安心視されている曾我先生や金子先生みたいになっちゃうという危機意識があったんです。しかしですよ、これもはや昭和四十年近くになりますと、

曾我先生の教えも随分浸透してきたので、いまや相伝義書の教学を公にしてもいいのではないかと判断した

と。元事務総長で教学研究所の所長も、そろそろいいかもしれないと（笑）。それまでは、危ないと。どれくらい危ないかというと、曾我、金子並みに危ないんだという、こういう発想ですね。だから、当時の同朋会運動前夜の我が大谷派教団というものの空気というのがだいたい分かりますよね。

（三）

さあ、もう一人、私もたいへん薫陶を受けたんですが、大阪の慧光寺というところがあります、五箇寺ですね、近松暢蒼という先生。この方はこの間の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の時に式務部長として陣頭指揮に当たられて、そしてみんなで打ち上げをやっている最中に倒れて亡くなったわけですね。だからまさに御遠忌に全てをかけた人ですが、この人が要するに宗門の、大谷派の声明のトップだったんですね、儀式作法の。その方の、これは城端別院での発言です。

儀式と教学が重なってこなければならぬ。それは私の一番の課題です。やはり相伝義書というの一言で云えば六要批判の教学と言えます。

つまり、高倉批判ですね。だいたい当時は『教行信証』を見ることは禁じられていまして、『六要鈔』を通して慮（おもんばか）れというのが真宗学だったんですね。江戸時代はですよ。

それをそのまま引きずってきているんです。

これはつまり六要は相伝でも批判していますけれども、還相回向についてほとんど述べられていない。まあちよつと述べられているだけであつて、つまり還相回向についての内容が欠落している。まあ高倉学寮というのは、『教行信証』を読むうえでは参考書になるのは『六要鈔』しかないですわね。唯一の参考書です。だから『六要鈔』で展観していきますと、その問題がそのまま引きずってきます。この還相回向がはつきりしないかぎりには儀式の説明が出てこない（儀式はただの付け足しということになりますね）。儀式が他力だ、他力の儀式ということになりますと、それは、はつきりと相伝の通りでないかぎり説明が出来ない。

この「相伝の通り」ということはですね、ここで大事なのは、信心も相伝だといっておるわけです。個人の主観じゃないんだと。こう言っているんですから儀式もそうだということですね。一言で言えば儀式というものは、声明もそうですし、それからもつと言え、こうやって法話をするこども、実はお莊嚴です。ですから、ある意味では真宗教団における一切のことは全部莊嚴と言つてもいい。だから宗議會も莊嚴でなければいかんわけだ。この莊嚴というのは一体どこに出てくる莊嚴かと言いますと、

つまり莊嚴というのは証の巻に出てくる、後半にある莊嚴であります。で、まあ辞書なんかみましても、仏事で

の莊嚴と『論註』で説かれる莊嚴とは別物としています。

けど、これは私としてはどう考えても別物とはいえない。

これは『教行信証』の証巻のどこに出てくるかと言いますと、ご自釈の中にこういう言葉があります。「從如来生」といいますね。「弥陀如来は如より来生して、報・応化・種々身を示現したまう」という。ちよつと今の『聖典』の読み方と違いますが、これが相伝の読み方ですね。如から私たちのところにやってきて、はたらきかけてきて、そしてこの方便法身とか応化身とか、あるいは種々身、あらゆるものを示現するんだと。これが莊嚴だということですね。つまり、何のことはない、阿弥陀如来がなさることが莊嚴。だから本願力莊嚴と言つていいし、他力の莊嚴と、こうなるんですね。私たちはなんか儀式というところから、「当流の儀式は大原流なり」なんていつて、なんか比叡山の天台宗の儀式を真宗が取り入れてやっているという解釈をほとんどの歴史家はしていますよね。そんなのとは全然違うんですね。阿弥陀如来の表現だというわけです。相伝に書いてあることから見れば阿弥陀如来の表現なんだけれども、今やっていることはどうにもそれが、いかにも教学と儀式が木に竹を接いだようでしっくりいかない。ある意味では二元対立して、やがては教学畑の人と声明畑の人とは性格が合わんとかね、そんなようなことになってくるわけです。それはおかしいんじゃないかと。「辞書なんか見ましても仏事での莊嚴と『論註』で説かれる莊嚴とは別物としています」と。『論註』の莊嚴というのはこれはもう天親菩薩の二十九種莊嚴であつて、これはま

さに浄土の話であると。一般に儀式作法なんてものは娑婆で人間が現実的に表現することであるというふうに、別物にしてますけども、

少なくとも莊嚴という言葉を使う以上は、そこに共通するものがある筈だ

と。これが近松さんの大きな一つの大疑団です。初一念といってもいい。それから、

これは足利さんが言ってたんですが、莊嚴はデコレーション (Decoration 飾り付け) じゃない。何やったかなあ、たぶんアドミニストレーション (administration 執行) だ。これはうる覚えですが、そういうことをおっしゃっていました。まず、それが一つ課題でございます

と。

(四)

さて、こういうことが一九九九年、ちょうど蓮如上人の記念すべき年に当時相伝に関わっておられた、というか、それまでほぼこつそりと関わってこられた方々が集まって、誠に真剣な研究発表がなされました。城端別院でも相伝文書が見つかったりもしました。私はたいへんな感動を持って思いつくわけですが、そういう中でだんだん、どうしてこの相伝というものが発見されて世に出たのかということも追々分かってまいりました。特に素晴らしい資料として私が思うのは、『相伝義書』の

一卷一卷に付いていた月報です。『相伝叢書』にはそれがないのが残念なんです、だいたい『曾我量深選集』でもそうですけど、全集の中に小さい紙みたいなのが挟まっていますよね、それに関係者の方がなんかちよつとした小文を載せておられる。いわゆるグリコのおまけ、グリコのおまけと言っても今覚えておらん人がいるかもしれないんですが、おまけみたいなものですね。その月報、『相伝義書』二十巻分を集めると一つの本になるぐらいなんです。これを全部読んでみますと、ここには大変な歴史的に重要な資料と言いますか、あるいはもうちよつと言えば、今後、真宗教学史としてこの相伝も研究されていくとするならば、非常に貴重な証言とかがいっぱいあります。

少しそういうものに触れていただきたいと思つて資料を用意してきました。第十巻の月報に書いておられる足利演正という先生ですが、この方はアメリカに行つて、アメリカの女性と結婚してロサンゼルスに住んだ人なんです。堺の真宗寺という五箇寺のお寺の方ですけども、結局これは養子を引きまして、その方に継いでもらつて、本人はロサンゼルスで亡くなつておられます。だから、継いだ方もお義父さんがどういう人なのか全然分からなかったんです。滅多に会わないんですけどね、ロサンゼルスですから。そんなことで分からなかったんですが、こういう言葉を残しておられます。これが大変貴重なんです。

一度、『相伝義書』とはいかなるものか、義父にお尋ねしたことがございました。その時、ただ一言、「曾我教学を裏付けるものです」と申されたことを記憶しており

ます

と。これは大変重い言葉ですね。「なんじやこれは」というようなね(笑)。足利演正という方がこの相伝というものを世に出した、しかもそれを自費出版とかそういうんじゃないくて、あくまで東本願寺から正式に出したということ。それに加担したのが嶺藤亮と藤元正樹という二人の超大物だったわけですけども、それがなかったら絶対あんなものは出ませんね。それには大変な苦勞があつて、もう五十年ぐらいの苦勞があつてやつと出たわけです。だからその足利演正という方の生涯にこの『相伝義書』の発刊というものが非常に大きな出来事、中心なんです。それって何ですかと問えば「曾我教学を裏付けるものです」と。これ非常に大事ですよ。決して曾我先生が相伝の影響を受けておられるとかそんなことは、絶対いわない。そうじゃないんです。だから、内容としては曾我教学を裏付けるものという。いったい誰が裏付けておられるのかね。具体的に言えば、蓮如上人が曾我教学を裏付けておられるというわけですね。これが大変重要な問題です。

ただそのやはりそれをこう、どう言うんですかね、曾我教学が、なかなか聞いても分からん分からんという人もいますし、私も全然分からないんですが、ただ、それが相伝と一緒に学ぶと非常に大きな発見があったというようなことを述べておられるのが高原寛正という先生ですね。これも月報の中に高原さんの言葉が入っておるんですね、大変面白いんです。

私なりに、従来のいわゆる「講録」を読みあさってみて

も満たされるものなく、ただ、求道的な思いから曾我量深先生の御著をひもといていた者にとって、曾我先生の思考と同じと感じられるものが、すでに、真宗の確かな伝承の中にあるということを知られたわけです。それを手にうけて、あちこち眼をとおしたとき、曾我先生の御著を手にしたまま、真宗相伝の歴史の内奥に引き入れられていく思いでした

(一九八〇年五月)

と。これがやつぱり「裏付ける」ということでしょうね。曾我先生の言葉に色んな感動が湧いてくるわけですけども、それは単に、なにかこう、言葉で酔っているんじゃないくて、これをちゃんと蓮如上人が証明してゐるぞという、確かな自信ですね。蓮如上人ということが、相伝ですから、もとは親鸞聖人であり、そのおおもとは法蔵菩薩であります。この法蔵菩薩から、あるいは阿弥陀如来様から印可を受けるという。確かなものだから、相伝というのはそういうものですよ。相伝というのはなんか夜中にこっそり耳打ちして伝えるとか、そんなものは相伝じゃないですよ(笑)。それは秘事法門です。そうじゃないくて、公に印可証明されると言ってもいいですね。「ハイ、それだ」とね(笑)。そういうものが非常に感じられたと。これは、私はこういうことを高原先生から直接聞きました。これについては大谷大学で講演なさったんですよ、高原さん。学園祭で私と呼んだんですけどね(笑)。その時にやつぱりこの曾我教学と相伝を響き合わせながら学ぶということとは、どこで響き合うのかと。

これも非常にヒントになったのはハワイの妙好人といわれたブルームという人なんです。アルフレッド・ブルームという方について、こういうことを言っておられる。

また、ハワイ大学のブルーム教授の来日を機に、私たちは「相伝義書」にもとづく法蔵菩薩論を中心に、三日間のシンポジウムをもつことができ、「相伝義書」のもつ教学性・思想性というものは、民族をこえ、いわゆる宗教をこえて、大きい意味をもつことを知らされました。といっても、私たちがそれを尽し得たのではなく、ようやく、そのことを知り始めることができたというに過ぎません。

このシンポジウムを高原さんがやられたんです。ここで私は引かなかったんですね、なんでハワイ大学なのかと。なぜハワイ大学にアメリカ人の妙好人が生まれるのかと。それで、そのブルームがなぜこの曾我先生の法蔵菩薩論と『三識之事』という、——『三識之事』は実はあんまり長くないテキストですけども非常に重要で、この『三識之事』というのは相伝の中での唯識論です。だから、この唯識というところで実は相伝と曾我量深は響き合っている。この響き合いというものを、おそらくブルーム教授は明らかにすることによって、宗派意識というものを超えて世界思想になるんだと。それでこの高原さんも大変張り切られたわけです。

〈五〉

さて、足利演正という方は鹿ヶ谷に昭和十一（一九三六）年に、この名前もすぐく気になる名前ですけれども、相念庵という、これは誰かの別荘があったんですね、この別荘でこっそりガリ版刷りの『略本私考』というものを、足利さんが全部ガリを刷って五十部作って、そしてそこにくる人と一緒に勉強を始めた。そこで、やっぱり大谷大学の人も呼んでこうよと、大谷大学の学生も参加すべきだということで、聞いたところによると食堂に「相承学園」という張り紙がしてあってですね、来たら必ず、鹿ヶ谷に有名な饅頭屋があつて鹿ヶ谷饅頭というものがあつて、それが出ますよということが書いてあつて、それに付られて行ったという話もありますが、嶺藤さんはその一番最初に行かれたんですね。月報の中の写真には大谷大学の学生時代の嶺藤さんも写っています。

足利先生は、曾我量深と金子大榮の追放というものを大学の二回生の時、二十一歳だったかな、その時にまさに曾我・金子両師が大谷大学を追われる姿を見てるわけです。学生にとつては大変なショックですよ。それで何かもう変わって、いかにも体制的な強硬な人が入ってきて、大谷大学の空気が全然変わってしまったと。この曾我・金子追放事件というのはですね、その時に日本の国では何があったかといったら、満州事変ですよ。満州事変からもう世の中の空気が一気に変わっていくわけですね。そういう中で足利先生は、ちようにお父様が結構古い文献とかそういうものを集めたり整理するのが好きで、たまた

までですね、絶対に見ちゃいかんといわれる蔵の中の文書を、初めはそんなところに文書があるとも知らなかったんですけども、それをこっそり見たら巻物が出てきたと。中を恐る恐る読んでみたら、足利先生は非常に賢い先生で、やっぱり読めるわけですね、そして、ちやうど問題になっていた金子先生の『浄土の観念』と曾我先生の『如来表現の範疇』としての『三心観』と、その内容がピッタリ一致するわけですよ。蓮如相伝といわれるけれども、もちろん江戸時代の書物が中心です。しかし、なんでも一致するんだと。これは相伝文書に対する足利先生の捉え方です。

いわゆる明治以前の講録とは大いに異なり、陳腐な面はなく、且つ思想的に一貫して曖昧な点がなく、従来の不明瞭な教学上の諸問題が容易に解決されて行くようで、この相伝教学―蓮如教学と称してもいい―が現代にもつ価値の重大さを知らされるのである。(一九七八年九月)

と。これは実は相伝を通せば、そっくりそのまま実は曾我先生、金子先生は何も間違っていないじゃないかと。逆にそれを責めている人たちの理論がおかしいと。だからそこにですね、学生でありながらですけども足利先生は、やはりそういう文書の第一発見者として大きな責任感を持たれたということですね。

しかし、鹿ヶ谷の相承学園の勉強会は一年間で中止になります。というのは、この昭和十二(一九三七)年に足利演正先生が大谷大学の、今でいう大学院、高等科を卒業なさいますアメリカに招かれたんですね。それはアメリカのどこかと言いま

すとサンフランシスコです。サンフランシスコにカリフォルニア大学バークレー校というのがあったんですよ。当時、日系人の中心はロサンゼルスよりもむしろサンフランシスコだったんですね。そこにバークレー別院というのがありまして、後に木越樹元・宗務総長がバークレー別院の輪番さんをしておられましたよね。それが、やっぱり日系人がバークレーからロサンゼルスに移って行くんですが、これはなんでもかといったら……、これからまた申します。足利先生はそのバークレー校で研究することになった。足利先生の専攻は原始仏教なんです。原始仏教の研究をするためにはやっぱりアメリカの大きな大学に行くに越したことはないですね。全然スケールが違うんですね。カリフォルニア大学というのは学生数が二十万人くらいいるんですよ。とんでもない学生数です。それであちこちに分校があるんですが、そのバークレー分校、そこでずっと勉強に励んでいたわけですね。やがて助手とか講師とかいう話が出てまいります。で、勉強が非常に軌道に乗ってきた時に何が起ったかといいますと真珠湾攻撃であります。

少し真宗の話から外れるようでありますけれども、これが実に重要なので興味の無い人も我慢して聞いていただきたいんですが、私もロサンゼルスに行った時にそういうことをいろいろ学びましたけれども、ちやうど一九四一年、日本とアメリカが十一月以降もはや絶望的な交渉を続けております。そういう中でアメリカは日本の外務省の外交暗号をみんな解読しております、そして十二月の、アメリカ時間で言いますと七日、

日本で言えば八日の早い時点から、これは日本は戦争を始めるつもりだということが決定的になっているということが分かっております。すでに一週間前からハワイの真珠湾の各基地には厳戒態勢、臨戦態勢、いつでも戦える状態にしておけという、こういう命令がきております。その時にハワイの陸軍の航空基地ではどうしたか。普通、戦争が始まるかもしれない、空襲があるかもしれないとなったら飛行機を飛行場の片隅にバラバラに分散して、ひとまとめにやられないようにするのが当たり前です。ところがハワイの航空基地は滑走路の真ん中に飛行機を集めてズラッと密集させて並べた。何をしているのかと言いますと、アメリカ軍はまさかハワイまで日本の空母がやってくるとは思ってなくて、むしろ何を恐れたかという目系人の襲撃なんです。つまり、日本とアメリカが戦争になればアメリカにいる滞在日本人とか日系人、あるいは日系二世が日本軍と呼应して反乱を起こして破壊工作をやるだろうと。ハワイの人口は今とはまた違っていて、日系人が人口の三分の一を占めていました。白人より多いんですよ。あとはハワイ系、中国系、フィリピン系とかあるんですけども日系人が一番多いんです。だから、戦争になったら暴動する、必ず敵になるということは織り込み済みという感じだった。だから、固めてあった飛行機の所へ日本の艦載機が空襲をかけたものだから、ものの数分も経たないうちに百数十機の飛行機が、あつという間に燃え上がって、何の抵抗もなく日本の機動部隊はアメリカの太平洋艦隊を全滅させることができた。しかも、これは結局外務省の下手

際で通知が遅れたものですから、アメリカにとつては騙し討ちという形になりまして、アメリカ国民は一斉に「リメンバー・パールハーバー」と叫んで、日系人に対して大変厳しい目を向けたんです。

（六）

ハワイには二十数万人の日系人がいますし、それからアメリカの西海岸には十二万人の日系人がいました。足利演正氏も西海岸のカリフォルニア大学にいました。ハワイには当時まだ日系人の中でアメリカの軍隊に入っている人がだいたい三百人位はいたのかな、そういう人たちはすぐに隔離されました。ハワイの社会の中でも日系人は全部隔離です。あとは大きな問題が起こったのは、一九四二年一月になって日本の潜水艦がロサンゼルス沖合に浮上して製油所を攻撃したんですね。その結果、アメリカはパニックになりました。スピルバーグ監督の『Top Gun』という映画をご覧になった方は、いかに大変なパニックになったかをイメージできるかと思いますが、それで西海岸の日本人は全部強制収容するということになりました。財産は全て没収です。そしてアメリカの、だいたい西部の方が中心ですけれども、十ヶ所の強制収容所に入れられるわけです。それはもう酷いところで、砂漠みたいな土地にあるんですね。荒地です、生きているものはガラガラヘビしかいないというような。しかも夏は暑く冬は寒く、その上隙間だらけのバラックで、ま

つたく四人扱いですね。

そんな中で大変なことが起こるんです。アメリカ政府は交換船というものを出す。交換船というのは、日本にもアメリカ人がたくさん住んでいましたから、アメリカの日本人と日本在住のアメリカ人とを交換するんですね。それで、浅間丸という船が出るんです、その交換船にみんな乗れと。どういう条件かというと、アメリカに忠誠を誓う者は収容所に残れと。しかし、日本に忠誠を誓う者は交換船で帰れと、そんな奴はアメリカに置いておけないと。それで交換船で日本に帰って来た人たちが千何百人います。その中には鶴見俊輔なんかがいたんですね。これがですね、実はその時にロサンゼルス郊外にマンザナー収容所というのがありまして、そこに足利演正さんもみんな入れられていたんですが、たまたまそこに当時八歳の岡村美穂子という人がおられた。この間亡くなった、鈴木大拙さんの秘書です。そうしたらね、岡村さんがこういうことを言っておられたらしいんですよ。アメリカに忠誠を誓うか日本に忠誠を誓うかということでもう親子兄弟から親戚からみんなバラバラになつて争つたというんですね。それこそ暴力沙汰になった。そういう中で結局帰って来るんですけども、だいたいハワイとか広島出身なんですよ。それで、日本に帰って行った人たちは広島で被爆して、今度は日本で差別されて、またアメリカに戻ってきたという。だから大変なことが起こったんですね。

こういうことで、帰る人は帰って、残った人たちは相変わらず悲惨な収容所暮らしが続くんですけども、実はその中で足利

先生に一つの転機が起こるんです。

ある時、日本語ができる看守が話しかけて来た。「アシカガは日本で何をしてたんだい?」「東本願寺という寺で莊嚴をしていました」「ジョウゴン? 聞きなれない日本語だが、どんな意味だ?」、足利は思わず「デコレーション」と答えてしまつて大いに動揺した。直訳としては間違っていない。

考えてみたら、聖道門の儀式というのは全部デコレーションですよ。あれは全部自分の芸術表現ですよ。だから、世界の宗教のあらゆる儀式も全部デコレーションですよ。デコレーション以外の儀式がどこにあるか。ところが、この時にしまったと思つたというんですね。自分は東本願寺で儀式作法をやる人間として、とんでもない言葉の罪を犯してしまつたと感じたそうです、

だが真宗の莊嚴とはそういうものなのか。足利は三日ほど寝ずに考え続け、ついに「アドミニストレーション」という言葉が胸中に浮かんた。これは「執行」という意味である。だが誰が何を執行するのか。それは如来が大悲を執行するのだと足利は気付いた。

これはですね、実はちょうど曾我先生の問題が起こった昭和五(一九三〇)年、曾我先生の講義の『浄土莊嚴の原理』が出ております。そういうものを読んで、そういうものが下敷きにあつたから出てきた言葉なんですよ。アドミニストレーションと。このアドミニストレーションということが結局、足利さんの中では還相回向なんです。

ということではすね、還相とは、『教行信証』で言えば証卷の途中から化身土巻まで、これが全てアドミニストレーションだ。つまり、浄土の莊嚴であります。こういう発想に立ち至ったわけですね。

(七)

その頃、一九四二年六月五日という日ですが、まずハワイで隔離されて収容されていた日系人二世の軍隊に入っていた元・兵隊さん三二七人が急に集合させられて船に乗せられてサンフランシスコに送られました。なんでかと言いますと、この日、実はミッドウェー海戦というものが行われていた。アメリカとしては負けるかもしれないという、そういう戦いでもし負けたらどうなるか。日本の艦隊がハワイに殺到します。そうすると、兵隊経験のある日系二世をハワイに置いておいたら完全に敵に回ると。そこでこの日系人が暴動を起こさないためにサンフランシスコに移したんです。そうしたら、サンフランシスコに着いたら今度は汽車に乗せられて、そしてミシシッピ州のキャンプ・シエルビーという所に送られていくんです。サンフランシスコからロサンゼルスを通って汽車が行くんですけども、その時、窓のブラインドをみんな閉めると言われるんですね。なんでかという、列車に乗っているのがみんな日系人だと分かったら、それを見た市民が日本軍が上陸してきたと勘違いするだろうと。だから、パニックになるから閉めると。

そして、キャンプ・シエルビーに送られて訓練を受ける。この時にサカエ・タカハシ大尉というリーダーがおりまして、みんなに演説するんです、「我々は今、二つの戦争を戦っている。自由の戦いと差別との戦いだ」と。これでみんなその気になった。自由の戦いというのは、自分らはアメリカ合衆国のデモクラシーを支持すると。差別との戦いというのは、自分たちの家族が収容所に入れられた、これを自由にするために自分たちがアメリカ市民として立派に義務を果たす、これが自分たちの使命だ。こう言ったわけですね。だから当時、色んな訓練をやつて、この日系二世部隊がいかなるアメリカ軍の部隊よりも高い成績を上げたそうです。それを聞いたルーズベルト大統領がこういうことを言っています。「デモクラシー精神は心の問題であつて、人種とか祖先によるものではない」と、こう言つて一つの部隊を編成したんです。これが、聞いたことあるかもしれません、四四二部隊という、日系二世部隊です。私がロサンゼルス別院に行った時に、その別院の中に日系人部隊の資料館というものがありまして、非常に生々しい資料がございました。

彼らは訓練を受けますと、一九四三年の後半ですけれども、イタリア戦線に投入されます。イタリア戦線で一番の激戦というのはモンテ・カッシーノの戦い。モンテ・カッシーノというのは、平たく言えばイタリアにとつての比叡山みたいなものです。かつて聖ベネディクトという人がその山を開いて修道院を初めて作つて、それでキリスト教の司祭たちを教育して、たくさ

ん聖職者を生み出していった。ある意味で比叡山とそっくりです。そのモンテ・カッシーノ、これは純粹な修道院で、そこを守っているドイツ軍は絶対に修道院の中には立ち入らなかつたそうですが、アメリカ軍はこれを敵の砲兵観測所と考えて空爆で全て破壊した。完膚なきまでに破壊しました。そして今度はドイツ軍がそこを要塞化したんですね。これを攻めるのになんぼやっても埒が明かんのでアメリカ軍は四四二部隊を投入して、四四二部隊は三八二人の犠牲者を出してそこを占拠した。それ以後、四四二部隊というのは常に他の部隊が行きたがらないような危険な戦場に次々投入されて、アメリカの部隊の中では一番の犠牲者を出しました。四四二部隊と一緒にモンテ・カッシーノで戦ったのがバツファロー部隊というもので、これは黒人だけで組織された部隊です。南北戦争の時代に北軍の中でバツファロー部隊というのができるんですね。この黒人兵だけの部隊というものがいつまで続いたかというとなんと朝鮮戦争の時まであったんですね。だから、そういう意味ではアメリカがいかにこういう問題にシビアナ国かということが分かりますね。

そして、この四四二部隊というのは結構使えるぞということが分かったわけですが、その中の砲兵部隊がありまして、これが第五二三砲兵大隊というんですが、これが分遣されましてノルマンディー上陸作戦に参加した。このノルマンディーに一番後に上陸した決戦部隊が第三軍といまして、その司令官がバットン大将といまして、大変なこわい人ですけども、そのパ

ットンの戦車隊を砲撃で支援するという任務がこの第五二三砲兵大隊です。第五二三砲兵大隊はパットンの命令でどんどん進撃しましてドナウ川を渡ってミュンヘンを砲撃するんです。ミュンヘンの北西約二十キロのところにダッハウという町がありました。そこに巨大な強制収容所を発見した。初め見つけた時は何だか分からなかったけれども、日系人の兵隊が鍵を銃撃して破って中に入ったら「俺たちが強制収容されたバラックそっくりだ」と。そこで二万五千人の生き残りのユダヤ人を彼らは解放したんです。ただ、当時のアメリカ軍の上官たちは「お前たちがこゝで見たことを口外すれば、軍法会議にかける！」といつてかん口令を引きました。

その後、彼らはやがて戦争が終わってロサンゼルスに帰ってきます。最初はワシントンに呼ばれて、当時はもう大統領が変わってトルーマン大統領。トルーマン大統領は凱旋式典でこう言いました、「諸君は今度の戦争で二つの敵と戦った。一つは戦場における敵であり、もう一つは米国内の偏見との戦いである。諸君はいずれの戦いにも勝利をおさめた」と言ったんですが、ところが彼らがロサンゼルスに収容所に戻る途中、食堂に入ろうが理髪店に入ろうがどこに行っても「ジャップ！」と罵られて追い出された。そして彼らは言ってみれば家も無い。しかも収容所は解放するから出ていけという。そこで、どこで寝泊まりしたかというと、ロサンゼルス別院なんです。そしてロサンゼルス別院を拠点としてロサンゼルスの郊外に土地を買って始めたのがリトルトーキョーなんです。もともとリトルト

ーキョーは戦前からあったものですが、この時に約二万五千人が移住して今のリトルトーキョーの元ができたんです。そしてこのリトルトーキョーに住む人たちが、だんだん生活が豊かになっていくにつれてロサンゼルス別院も立派になっていった。いまやアメリカの真宗大谷派の中心がロサンゼルス別院ということになってきたわけですね。

（八）

そこに足利演正先生も、今度はカリフォルニア大学のロサンゼルス校に招かれて、そして原始仏教を教えた。やがて助教授になり最終的には教授になり、とうとう最後は東洋学部長という、大学の中でも幹部になるんですよ。日本人はそれまで日本とアメリカは行き来ができなかったんです。一九五二年四月にサンフランシスコ平和条約というものが発行されて、やっと渡航ができるようになりますから、それまでずっとアメリカにいたわけですね。

そして、それから間もなく、一九五五年十一月から一九五六年の一月にかけて、なぜか曾我量深先生がアメリカに現れたわけですね。曾我先生はこの時に三ヶ月アメリカに滞在しているんですよ。なんのために行ったのかも分からない。向こうで何をしていたのかも分からない。誰か知っている人がいたら教えて欲しいんですが、ただ、曾我量深という人は全然英会話ができなかったそうなので、ロサンゼルス別院で誰かがそばに付い

ていないと、とっても無理ですね。また反日感情がものすごく強い時期です。その時に曾我先生を支援したのが、当然、日系人たちですよ。そしてその中心にいたのがロサンゼルス別院の輪番の伊東抱竜という人と、それからもう一人が足利演正と。そしてその時に足利演正さんは三ヶ月もあるんですから、曾我先生と唯識についてずっと話をした。特に相伝の文書をいろいろ見せたそうですが、曾我先生が関心を持ったのがやっぱり唯識のことが詳しく書いてある『三識之事』だったと。私が聞いているのは、曾我先生はこれをどうか貸していただきたいといつて、ずっとホテルで読みふけたということを書いております。

それでこの曾我先生が、おそらくこの時がアメリカ滞在の最後の時期だと思いますが、一九五六年一月二十一日に、曾我先生が『佛様とは』という短い文章を書いておられます。いまロサンゼルス別院にありますよ。これは「為伊東令夫人」と為書がありますから、輪番さんの奥さんに送った体裁になっておりますが、こう書いてあります。

一 仏様とはどんな人か

答、仏様は、われは南無阿弥陀仏と申すものであると名のつておいでなります。

二 その仏様とはどこに居られますか

われを南無阿弥陀仏と念じ称へる人の直前においてになります。

三 そんならその仏を私達が念ずるにはどのやうな方法

がありますか

南無阿弥陀仏と、一念疑なく自力のはからひをすて静なる心をもって、仏願くはこの罪深き私をたすけましませと念ずるのであります。これはだれでも、どこにゐても、いつでも、かなしい場合でも、うれしい場合でも、たやすく自由に仏を念ずることができのです。この念が現前する時、いかなる煩惱妄念が襲ひ来たつても内心の平和は絶対にやぶれません。是を眞の救済と申します。

これ、ものすこい易しい言葉です。これは果して単に伊東令夫人に書いたものでしょうか、この極めて平易で分かりやすい日本語が。私は思うんですね、伊東令夫人の向こうにはロサンゼルス別院に集う大勢の日系人がいたに違いない。さらには、その向こうには、やはり差別とか戦争とか、あるいは自由の制約とかそういうもので苦しむ、もつと言えは、峨々たる岳山に群集する、全人類がいたはずです。この言葉を残して曾我先生は日本に帰るんですが、なぜこの言葉が出てきたのか。私は思うんです、いったい三ヶ月もロサンゼルスで何をしてもらったのか、当然、日系人の人たちと仏法を語っておられたに違いないんですよ。その日系人の人たちは収容所を出されて、行く当てもなく別院に来た人たち。この頃になりますとだんだんリトルトーキョーも発展してきますが、しかし一番の問題は四四二部隊で帰還した人たちですね。ダッハウの収容所を見た人たちです。この人たちはかん口令を施かれて言うに言えない、誰に

も。しかしおそらく直接的な形ではないにしろ、そういう悩みを訴えたに違いない。これはですね、ちょうど曾我先生が滞在しておられる真最中に、ある一つの出来事が起こったんです。それはキング牧師が公民権運動を始めた。パッファロー部隊にいた黒人兵たちもみんな黒人の権利を求めるという運動を始めました。これもやはり当時の日系人には刺激になっていたと思います。

そういう中で、やっぱりこのダッハウで見た、心の傷というのは、当時はなかなか分からなかったんですが、実は曾我先生が亡くなったずっと後ですけども、一九八二年に「イイチロー・イマムラ軍曹日記」というものが見つかったんです。ドイツのユダヤ人強制収容所についての情報というのは、アウシュビッツなんかでもきちんとした文献資料というのは何にも無いんですよ。しかもアウシュビッツといったらすこい所が残っているように見えますけども、あれは実はソ連軍がいったん爆破したものをまた復元したものです。それは、何かこいうものが表沙汰になると、自分らもまずいんじゃないかという物はみんな爆破したんです。アメリカはアメリカで、強制収容所に収容されたユダヤ人たちを解放したのがアメリカの強制収容所に収容されていた日系人だったというのは知られたくないんです。だから秘密にした。それが「イイチロー・イマムラ軍曹日記」というものがマスコミにつて、それで初めてその時の当事者がその場で書いた資料が見つかったということです。普通は兵隊というものは日記をつけないものなんです。だから

非常に貴重なものです。こう書いてあります、「雪が積もった地面に五十人ほどの囚人が寝そべっていたり、よろよろと歩いているのを見た」「まぢかに見ると、彼らはユダヤ人だった。黒と白の縦縞模様の囚人服を着ていた。ぼろぼろの毛布をかけている。寒かった。雪は二フィートほど積もっていた。囚人たちは骨と皮だけである」「積もった雪のうえに、縞模様の囚人服の遺体が幾重にも重なっていた」「部屋の戸を開けると、信じられない光景を見てしまった。床から天井まで骨が積み上げられていたのである」「囚人たちがひとりずつ出てきた。みな無表情で、感情を失っているようだった」と。ところが当時の日系人たちは、これはもしかしたら、このそっくりな建物がアメリカのマンザナーで、もし当時のドイツみたいに食糧難が襲つて、一ちようと彼らがダツハウを解放した四月二十七日というのはヒトラーが自殺する三日前です。その時にもしアメリカが大変な状況になっていたら日系人もこうなつたんではないかと。こういう問題ですね。

〈九〉

これについて、ルース・ベネディクトという研究家が『菊と刀』というものを書いております。その中で彼女がどういふかという、いわゆる西洋人の文化は罪の文化、日本の文化は恥の文化だと。恥というのは他人との関係において起こるものである。いわゆる外からくるものである。ところが罪の自覚とい

うのは主体的な自己の良心から起こるものである。従つて、西洋人の方が日本人より倫理性が高いと。こういう結論ですね。しかし、じゃあドイツ人とアメリカ人はどうなのかという話になります。そこで、曾我量深先生はこういうことをいっているんですね、理知というものは汚染されたものだ。ベネディクトのように自分の中に倫理性というものがあつて、それが高い民族と低い民族がいて、高い民族がやっぱり倫理性をもつて指導すればうまくいくなだという発想は、実は当時の日系人たちも、どうもそれは違ふんじゃないかと。むしろ、彼らはみな真宗門徒ですからね、やっぱり宿業という問題を考えてと思います。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」(『真宗聖典』第二版776頁)ということですね。この理知、——実は昭和六(一九三二)年に大谷大学を追放された曾我量深、金子大榮が興法学園というものを開いた。その時に最初にやったのは『興法』という雑誌を創刊したんです。その創刊号になんと曾我量深は「大寂三昧について」という文を書いておられます。ちよつと読みますと、

世尊の「諸根悦豫、姿色清淨、光顔巍巍たること明淨なる鏡の影の表裏に暢るが如く」なる円満なる尊容に寄顕する所を推察するに、此れ恐くは我等が常に自己の生命たる主觀の感情が、虚偽なる客塵の影たる理知の為に汚染せられんとするを痛傷し、その清淨性の源泉として、内に求めて止まない所の、根本的な純粹平等感情それ自体でないであらうか。(『曾我量深選集』第四卷)

と。難しい言葉ですが、たぶんこれ法性法身とかそういう意味だろうと思います。如来心ですね、

この円満平等なる根本的純粹感情に対する信樂こそ人類の一切の精神文化の源泉となるべき純粹宗教的信仰の必然的根拠である。随て我等の眞實の信仰が限りなく理知の汚染を超越する力の根本である。

(同)

ここに「理知の汚染」という言葉が出てまいりましたが、曾我先生が九十五歳を過ぎて、あるお寺で法話中に縁側から転げ落ちて怪我をなさって、それからもう立てなくなつて亡くなるんです。その時に富山の女性が二人、ずっと看病されたんです。その時に、最後に残された言葉というのは、『歎異抄』の「善人なおもつて往生をとぐ、いわんや悪人をや」(『眞宗聖典』第二版768頁)とはどういうことかという「善人に対する戒めです」と言われたと。

私たちは今、ウクライナ問題とか色んな危機を、あるいは氣候変動の問題とか色んなものを抱えておりますけれども、今のところ色んなアプローチを見ていますとやはりこの理知ですね。そうではなくて、もつと根元的なもの、もつと根元的なところに立つた時に曾我先生がいつておられる「人類の一切の精神文化の源泉」というものがそこに明らかになるんだと。それ以外に解決はないんですね。例えば日系人の人たちがずっと戦後も差別され続けている状況の中で、おそらくこのユダヤ人収容所の問題とか、自分たちが収容された経験とか、そういうものと寄り添いながら、ルース・ベネディクトは恥の文化というもの

を見出したに過ぎないけれども、曾我先生はそうではなくて、この理知を超えたもの、すなわち阿頼耶識の問題。私たちの眞宗宗というものが教団というものを超えて、峨々たる岳山に群集する全人類に向き合つていく、そういう精神ですね。これはブラジルでも起こったことでもありますし、私は曾我教学というものがなにか非常に社会というものと関わつていく力を持つていると思います。

そういう力の獲得がどこで起こっているのかという時に、間違ひなくこのロサンゼルススの三ヶ月というのは重要な意味を持つんじゃないかと、今のところ妄想しておる段階ですけども、ぜひまた皆さんもこういうことについて研究を深めていただいて、できたらこの三ヶ月間に曾我先生がどういうことをなさつておつたのかということが解明されていくと、非常にそれは意義深いんじゃないかと思ひます。私からは以上でございます。

〈質疑応答〉

貝沼

曾我先生がアメリカに行かれた理由というのは分からないんですかね。

太田

私は分かりません。

貝沼

僕が聞いておりますのは、宗正元先生からなんですけれども、アメリカから帰られてから、それから清沢満之先生との出遇いを話すようになったと。アメリカに行くまではほとんど清沢先生のことを口にすることがなかった曾我先生がアメリカの三ヶ月を通して、向こうでお腹をこわしたとは聞いておるんですけれども、何かあったんだらうと。アメリカから帰られてから、特に清沢先生のことをよく取り上げられるという。そういうことが非常に大きな特徴なんだというのを僕は聞いておるんですけれども、そういうことは何か聞いておられますか。

太田

聞いておりませんが、非常に貴重な情報だと思います。

貝沼

僕はそれは直接宗先生から聞いておるんですけれども、ただ、どう考えても曾我先生が自発的に行かれたということは考えにくいと思うんですね。やはりなにか呼ばれたとか、そういうことは何か分らないんですかね。

太田

これは分からないままで言いますが、私はロサンゼルス別院でこの伊東輪番の後に輪番になられた斎藤暁興先生がですね、暁の字は暁烏敏の暁ですから、私は「斎藤先生は暁烏敏先生の薫陶を受けておられると承っておりますが」と言ったら、「いかに、そうです」と、こう言われた。それで、「じゃあお尋ねしますが、先生は暁烏敏先生にどれほどの期間学ばれましたか」と不躰な質問なんだけど、そしたら斎藤先生が答えられ

たのは「十五秒です」と（笑）。「その十五秒の内容は」と聞いたら、暁烏先生は目が見えなかったからね、斎藤先生の肩を叩いて「ロサンゼルスのことを頼んだぞ」と、こう言われたと。

「私にはそれで十分だった」と。私は思うんですね、なんで十分だったのかというと、当時のロサンゼルスの日系人社会において非常にそこには悲哀があるんですけれども、その人たちはほとんどが真宗門徒で、ある意味では、人類の思想的にみたら大変重大な出来事が起こっていたんじゃないかと。だから、それこそ真宗を世界思想にしないと、これ解決しないという問題ですよ。そこから曾我先生が清沢先生のことを語られ出したというところもなんとなく分かります。私がブラジルに行った時に、やはり向こうに日系の人たちがおられます。そういう人たち、さらにはその別院で向こうの人たちが大谷派教師になったりしているわけなんですけども、「何のために皆さんは真宗を学んでいるんですか。何のために衣を着ているんですか」ということを聞いた時に、みんな異口同音に「全人類を救うためです」と言うんですね。私ら日本ではちよつと聞かれない言葉ですよ、衣を着ている人に何のために衣を着ているのかと言ったら、「いやー、自坊を守るためだ」とかね。ところが全人類を救うためということをみんなが言う。これはおそらくロサンゼルスでもそうだろうと思います。だから、そういうことが当たり前になっているような、そういう願いを持った世界というのはね、やつぱりすごいと思うんですよ。

四四二部隊で片腕を失ったダニエル・イノウエという人がい

る。この人はハワイ在住でしたけども、長い間アメリカで民主党の上院議員を務めて、五十年近く議員をやった。大統領の次に偉い人だといわれたその人が日本に来て、当時の岸信介首相と話をした。その時に岸信介がね、「お前は出来損ないの日本人だ」と言っただけですよ。それはどういうことかというのと、たとえ家族を守るためにしろ祖国が戦争をしているにも関わらずアメリカ軍に入って祖国の同盟国の兵隊に銃を向けるのは何事かという話なんですね。例えば、鶴見俊輔なんかはハーバード大学を出て、日本に帰って海軍に入ってるんですね。では日本が大変な空襲を受けたり原爆を投下されたりしている時に足利演正は、本山の式務部長はどこに行っただけなんだと。アメリカに行って大学で教鞭を取ってアメリカの奥さんをもらつてと。必ずそういう眼で見る人がいた。だから、当時の戦中派の眼というのがすごかったと思うんですよ。そういうことも考えますと、これはやっぱり業の問題ですね。正しいとか正しくないとか、善とか悪の話ではとてもくれない。

そういうものが僕はやっぱりね、曾我先生の教学的には、言葉は変わらなくても、やっぱり思想性というものがずいぶん深まったんじゃないかと思うんです。あるいは拡大しているというのかな。上手くは言えませんが、この時期、公民権運動が起こったその年に曾我先生がその場所にいたというのは、やっぱりすごいことだと思うんです。大事なことは、これは私の妄想に過ぎないんですけども、同朋会運動というのは単に日本の中で、本山でやっていた運動じゃなくてですね、なんかね、

大事な部分がロサンゼルスとかサンパウロでも起こっていたんだと、こういうふうに妄想できないものかと思っております。すみません、変な答えですけども。

貝沼

時代的には一九五五年なので昭和三十年ですから、朝鮮戦争が始まりまして日本は神武景氣に沸き立つという。ですから当然そこにはグローバルな視野が日本人の中に開かれてくるということがあったということが推測されますけども。僕はこれも宗正元先生から直接聞いておるんですけども、曾我先生が語学ができないということをポロポロこぼされたということを直接聞かれたと。そういう意味でグローバルな視野ということがやはり、ひよつとしたら曾我先生ご自身が望まれて、やっぱりアメリカの地に行きたいというふうに思われたのかなということ、いま太田さんのお話を聞きながらですね、業の問題というものからそういうことをちよつと思わされたんですけども。

太田

おもしろいですね。かえって語学が出来ないほうが、外国へ行つて何か感じるものがあるんです。負け惜しみかもしれないですけども、語学ができないことによってかえって向こうの心が伝わってくるというか。言葉が分からない代わりに伝わってくるものがあるというか、そういうこともありますよね。

貝沼

とにかく、僕にとつて一番気になるのは、アメリカから帰っ

て来られてから清沢先生のことを語られるようになったという。それまではほとんど語られることがなかったのが曾我先生だったそうです。

太田

たいへん興味深いです。

那須

違いますよ。「如来あつての信か、信あつての如来か」という問題、初期のあの問題をもう一度深く考えるために特に言われ出したのであつて、しょっちゅう文章の中には清沢先生のことが出てくる。曾我先生が清沢先生のことを言われないということはいいです。その問題に対する答えを長いことしていません。最後にするとという意味で晩年に言われたんです。だからそれまでに清沢先生のことを言われないということは絶対にはいけません。しょっちゅう文章には出てきます。

太田

先ほど那須先生が言われた『資生産業みなこれ仏道』という、あれは実は『生産道の宗教』の中に入っております。あれが語られたのが富山県の魚津の生地（いくじ）というところなんです。しかも昭和二十九（一九五四）年、朝鮮戦争の講和会議が行われている時です。これからどんどん軍需景気がきて、この後、日本はどんどんどんどん経済的に発展していくんだという気分の中で「生産道」というのが語られていて、その後、曾我先生はアメリカに行くんですね。しかも、その『生産道の宗教』というものを特に取り上げて、真人社がわざわざそれを

本にして翌年に発行していますね。こういうこともどういこうとだろうと。私はどうもそのへん分らないことがいっぱいあるんですけども、ぜひまた情報を交換したいと思います。

貝沼

具体的には農業ということをものすごく大事にされているというような内容ですね。

太田

まあ、農業とか畜産とか、言ってみれば産業全般ですよ。

貝沼

文章の中では工業とか入っていないです。

太田

なるほどなるほど。それからね、生地という所はどういう所かというと、女性たちが米騒動を始めた所なんです。それで、その生地に行く途中、必ず曾我先生が目になさったと思います。が、富山県に独特の法蔵菩薩像というものが、地藏さんみたいなものがあるんです。痩せ仏で、五劫思惟像が。絶対あれは曾我先生は見ておられると思いますよ。

那須

曾我先生とそれから相伝の、非常に具体的にその関係をお話しいただいて大変ありがたいと思っております。私もずっと相伝は高原先生の時に、ずっと。それから足利先生の時も京都ですと学んでたんですけども、これはちょっと邪推かもしれませんが、高原先生が急にですね、相伝だけになって、曾我先生のことを言わなくなった。それから私もあんまり付

き合うことがなくなつて、私が実は曾我先生ばっかりになつちやつて。あんまり相伝の方を見ていなかったんですけども、今回は非常に具体的に曾我先生との関係を教えていただいてありがとうございます。

ただ、一つお聞きしたのは、なぜ藤元先生が、相伝は生活で教学じゃないんだといわれたということですか。曾我先生の教学という使い方は僕は嫌いですけども、相伝は一応、五箇寺だとか、お西で言つたらいわゆる由緒寺の人が事実としては伝承してきたのですが、それがどうして生活だと。相伝は生活だといわれた意味が、もうひとつ私には分からないので、その辺がどういうことか、分かつたら教えていただきたいと思います。

太田

五箇寺というのはあくまでも制度的なものであつて、五箇寺の思想、あるいは五箇寺の教学と言ふわけにはいかんと思うんです。また、畑辺さんなんかも言っていました。結局、五箇寺の制度が江戸時代の封建社会の中でだんだんだんだん窮屈なもの、権威主義的なものになっていくんですが、それ以前ですね、例えば一如上人の時代ぐらいになりますと、ほんとに御堂衆の噫慶（いきよう）みたいな人が相伝の中心にいたり、もつと古い、蓮如・実如時代になりますと、相伝の中心にいたのは慶聞房龍玄でありまして、こうなつてきますと、特権階級が相伝を牛耳っているという姿では全然ありません。そんなこともありますし、まだまだ思ひつくことはあるんですけども。

那須

お西でもお東でもどつちでもそうですけども、式務関係のところで教学が発達したということはもちろん分かつていたんですけども、そういう意味でしたら分かりました。

太田

この生活ということについては、私、ちよつと引つかかるのは暁鳥敏先生が「同朋生活運動」ということをいわれた。あれと同じ頃に、これは具体的に言いますと昭和二十三（一九四八）年です。柳宗悦が鳥取で因幡の源左という妙好人を発見するんです。その時に、なぜかその鳥取の願正寺というお寺は門徒総代が、当時広島にいた金子先生の大ファンで、私、実際にそこに行つたら金子先生の本が全部そろっているんです。それで、その法話は金子先生一本だと。そこはお西のお寺なんですけどもね、金子先生はいつもそこに来ていたと。そして、なんとあの柳宗悦の名著の『妙好人―因幡の源左』というのは、金子先生も言葉の整理を手伝つて一緒に編集した本だということに向かうの住職から聞きました。「土徳」という言葉は、その時に柳先生から金子先生に伝わったようです。だから、この生活という、こういう言葉も、暁鳥先生と柳先生の付き合いもありんですけども、柳先生と金子先生との付き合いというのもすごくあるんですよ。だから『美の法門』というものを柳先生が出版して、たしか限定二五〇冊か四〇〇冊だったか出したんですけど、そのうち一〇〇冊を金子先生が買ったと。何にするんですかといつたら、自分のゼミの学生に配ると、こういう話だった。つまり、妙好人とか、あるいは民藝とか、そういう

発想からこの生活ということが、ずいぶん言われるようになってきたんじゃないかと。特に金子先生が生きておられた時、ここではお西の人が多いんですけども、その人たちもずいぶん生活とか土徳ということを言うようになった。これはお西のほうですよ。それはどういう時かというと、広島の復興なんですよ。だから、なんかね、そういうところで真宗というものが思想的に何か力を得るといいますか、そんな感じがしているんですけども。まだうまくは言えませんが。

(二〇二三年九月九日 真宗佛光寺派本山 佛光寺 白書院)